

おまぐり

◆ 27 ◆

手仕事の技生きるクリーニング

狛江三叉路の近くにあるクリーニング店の山木屋（東和泉2-2-4）は、大正時代初期に狛江で紺屋（染め物業）を始めた長い歴史を持つ。創業者の横山春吉さん（明治8年～昭和27年）は用賀（世田谷区）で紺屋を営んでいたが、火事に遭い、後に狛江一の繁華街となる銀行町へ移転した。銀行町の店の中でも古い方で、当時はまだ民家が1、2軒しかなく、仕事量が少なく苦労したという。妻のキヨさん（明治10年～昭和48年）が結髪屋を営み家計を支えた。街の発展とともに仕事が増え、はんでんやはっぴなどの藍染めを多く手がけ、柄物は京都の染物店に依頼、洗い張りもしていた。

山木屋

43年～平成6年）は調布の紺屋で修行して家業を継いだ。仕事は順調に発展、高級な着物の洗い張りを頼まれることも増えた。店の作業場には10個の藍瓶がすえられ、周りには洗い張りの反物がずらりと並んだという。

3代目で現当主の彰さん（77）は学校卒業後、会社に勤めたが、親の願いもあって会社を退職した。しかし、炎天下でする洗い張りの仕事のつらさを知っていたため、クリーニング業を選び、世田谷区などの店で3年間働き仕事を覚えた。34年頃に家に戻りクリーニングの仕事を開始した。父の一郎さんは藍染めと洗い張

りを続けていたという。

彰さんは、洗濯や乾燥は主に機械を使うが、それ以外の染み抜きなどの作業は現在も手で行っている。ていねいな仕事ぶりが信頼され、高級品のクリーニングを頼む顧客も多い。

妻の悦子さんは「染み抜きなどの仕上げは本人が納得するまでやめません。そういう父譲りの職人気質にほれこんで、長く付き合ってくださいお客様のためにも手作業で続けていきたいと思います」と話している。

山木屋 ☎3489-4984 営業時間＝午前7時30分～午後7時 定休日＝日曜日



セーターにアイロンをかける横山さん

大正初期に狛江へ移転／父の代まで染め物や洗い張り手がける

駅前に大きな絵手紙ずらり

狛江駅北口ロータリーからエコルマホール横を通る歩道のガードレールに、市内の名所をかいた大きな絵手紙が掲示されている。多くの人に狛江と絵手紙の魅力を知ってもらおうと9月27日から掲示した。通勤や通学、買い物などで駅前を訪れた人が足を止め、「狛江にこんなすてきな場



掲示された大きな絵手紙

所があったなんて」などと話しながら熱心に見入っていた。「絵手紙発祥の地—狛江」実行委員会の委員などがかいた作品など24点が鮮やかに印刷されており、約110㎡の区間に取り付けられている。実行委員会では「この大きな絵手紙をきっかけに、市内の名所を訪れ、ぜひ狛江めぐりをしてほしい」と期待している。



石井みえこさん（和泉本町）

ひろがれ 絵手紙の輪

「狛江—絵手紙サポーター」から寄せられた絵手紙とコメントをご紹介します。問い合わせ ☎3430-4106（一財）狛江市文化振興事業団

この絵手紙に込めた思い「秋の花、ピンク色のコスモスをいただいたので、かいてみました。秋桜とも呼ばれますが、コスモスはキク科の花で、春に咲く桜はバラ科なのですね。いろいろな色の花がたくさん咲いているコスモス畑は本当に見事ですが、一輪挿しのコスモスも私は好きです」

種類も豊富な冬の花、手間暇かけて栽培

冬の花として親しまれているシクラメン。狛江市内では2軒の農家が栽培している。

中和泉にある「小町園芸」では、小町新一さん（61）と長男の友一さん（36）が、約30㎡の敷地に建てた4棟の温室でシクラメン約4,000鉢、ミニシクラメン約2,000鉢を育てている。色は赤、ピンク、白などで品種は約40種にのぼ

る。前年の10月下旬に種をまき、2月に鉢に植え替えて育て、11月中旬に出荷する。直売のほか、JAマイ

ンズでも販売する。種子から出荷まで14～15カ月かかり、その間鉢を植え替

たり、むらなく生育させるため葉を均等に組むなど、栽培



シクラメン

多くの小・中学生育てた少年体操クラブ

昭和40年代半ば、狛江グランドで行われた狛江町体育祭の準備体操の模範演技。演技しているのは、コミュニティドラックみどりの経営者大野善明さん（69）が40年に創設した狛江少年体操クラブの小学生。

子どもの頃から運動好きだった大野さんは高校時代

に体操部に所属、隣接する大学の助手で、後に東京オリンピックの体操男子個人で優勝した遠藤幸雄さんから指導を受けた。

当時は体操ブームで、高校在学中に狛江中学校（現・狛江第一中学校）の体育館を借り、週1回小・中学生に鉄棒、跳び箱、床運動など

を無料で教えた。卒業後は、家業を手伝いながら体操クラブの運営にあたり、42年に狛江第二中学校ができる



肖像の狛江

（写真右）、東京都や狛江町の体育指導員の資格も取得した。41年から開催された体育祭にはクラブとして参加、準備体操などを担当した。

クラブ発足時は約50人だった子どもは徐々に増え、最盛期には100人にも達したという。クラブに通う子どもには自分の力を知



るために各地の大会への出場を薦め、47年、48年には都大会で優勝した中学生もいる。

大野さんは家業が忙しくなり50年代半ばには指導員を辞めたが、クラブはいまも続いている。

取材・写真協力＝大野善明さん。

旬菜

シクラメンの栽培を昭和47年から始めた。現在



シクラメンの世話をする小町友一さん

は友一さんとともに年間約40種の花や柿、野菜などを栽培している。

友一さんは「いまの時期は家族総出でシクラメンの世話をしています。毎年来てくださるお客様が多く、栽培に手間はかかるけれど、『花がきれい』『花が長持ちした』などと聞くと、とてもうれしいです」と話している。

わっこで広告 手軽です。
 商店・会社・商品のPR、求人、イベント・催事の告知、教室・塾の生徒募集などにご利用ください。
 掲載料金は1回1万円から（消費税・制作費含む。料金はスペース回数によって変わります）
 申し込み・問い合わせは ☎03-3430-6617 NPO法人 **k-press**